



| | |
|--------------|---|
| Title | 大学授業に対するイメージと学習観・学習活動の関連性 |
| Author(s) | 河井, 正隆 |
| Citation | 大阪大学教育学年報. 2002, 7, p. 37-46 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/12115 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大学授業に対するイメージと学習観・学習活動の関連性

河井正隆

【要旨】

本研究の目的は、インタビューを通して、大学授業に対するイメージと学習観・学習活動の関連性を探ることにある。その際、大学授業のイメージに焦点化し、3者の関連性について探索的に検討を行った。つまり、個々の学生がもつ学習観や学習活動を、大学授業のイメージを通して描かれる学習観や学習活動と捉え直し検討を行った。

本調査から、それらの関連性のなか、一つの特徴的な学生像が得られた。それは、大学授業を「一方向的」イメージとして捉え、「人生密着型」学習観をもち、学習の取り組みとして「自力型」取り組みを見せる学生像である。この研究で得られた知見は、大学授業を考える検討資料として有用と思われる。

1. はじめに

近年、18歳人口の減少や情報化社会、高学歴社会などといった社会情勢を背景に、大学の大衆化にともなう多様化のなか、わが国における大学教育の改革は、めざましい勢いで展開されている。この改革の展開では、大学で学ぶ学生像も、従来とは違った学生像として把握され直し、教育の方法や内容など、大学授業のありかたそのものを問い合わせていることが、一つの特徴といえよう。言葉をかえていうならば、新たな学生像としての、さまざまな背景（学習歴、価値観など）をもつ学生たちが主役となる、大学授業のありかたが模索されはじめているともいえる。

しかしながら、その問い合わせや模索の多くは、授業評価と称する教授者側の視点による、授業の問い合わせという試みが、現在の授業を問い合わせ主流であるように思われる。つまり、学生個人の背景や学習スタイル、そして、そこから顕在化する学習活動の実態などを把握することなく、教授者側の論理で、大学授業の問い合わせや模索が、その大部分であるように感じる。

このような背景には、従来からの、ある一定の学習歴を保持したステレオタイプ的な学生像を払拭できない教授者側の硬直化の問題か、または、大学生としての学習者に着目した研究の乏しさに起因しているものと考える。大学生を対象とした先行研究としては、例えば、山地（1991）は、大学生へのインタビューを通して、学生の学習観の仮説モデルの構築を試み、また、溝上ら（2001）は、同様にインタビューにより、学生の自己や生き方についての詳細な報告を行っている。

大学における、効果的な授業を実践するうえで、学習者の実態把握が必要不可欠という論に、おそらく、異議をとなえる研究者や大学関係者はいないであろう。しかし、この点への論究は多くはない。

以上を踏まえ、本研究の目的としては、大学の授業のイメージをもとに、学習観・学習の取り組みとの関連性を探索することにある。その際、先行研究では、ほとんど用いられなかった分析視点として、大学授業のイメージに焦点をあて、そこから得られる、学生の傾向性を学生像として捉えることにした。

この捉え直しは、大学授業を論じる、新たな検討材料を提示する意味で有用と思われる。

2. インタビュー調査について

インタビューでは、学生個々の大学授業のイメージと、そのイメージに関連して、学習観や学習の取り組みについて調査した。それは、個々の学生がもつ大学授業のイメージや、そこから発する学習観などを語る際に、主に日常のなかで描いている像を表現する言葉に注目し、信念や比喩などの語りを引き出すことに留意してインタビュー調査を行った（梶田・石田・宇田1984）。さらにいうならば、学生がもつ漠然とした暗黙的なイメージを探る必要性から、「比喩などイメージを表現する修辞表現」（秋田1996,p.52）を抽出することに力点を置き、調査を実施した。

ここで、本稿で用いる「授業イメージ」、「学習観」、「学習の取り組み」を、それぞれ次のように定義しておく。

まず、「イメージ」について、次のように捉えておく。「イメージ」そのものは非明示的なものであり、「感情や価値、要求、信念が結合」(Elbaz 1981,p.61) したものともいえ、一般に価値判断を含みつつ、簡潔な比喩的陳述の形で表され、目的行動を直感的に導く働きをするものとする(秋田1996)。そこで、大学授業へのイメージとして「授業イメージ」である。

また、「学習観」とは、学習者が学習という事柄に付与する意味であり、「意義や評価、行動内容、動機、感情価といったものの複合体」(山地1991,p.121)で、個人的な特性そのものとして捉えることにする。そして、「学習の取り組み」とは、「学習観」により導き出される、具体的な行為としての、日常の学習活動と捉えておきたい。

これら三者の関連性は、次のように位置づけておきたい。

さまざまな要素からなる、複合体としての表される個人的特性の「学習観」により、具体的な行為としての「学習の取り組み」が現れる。しかし、非明示的で暗黙的な心情であり、目的行動への推進力である「授業イメージ」が、この流れに何らかの影響を与えるものと考える。この三者の関連を図示すれば、図1となる。繰り返しになるが、図1で再度、言葉をかえて三者の関連性を確認しておきたい。第一に、学生の属性(背景)から、必然的に個人の学習観が構築され、その学習観に支えられての学習の具体的な取り組みが生じるという流れがある(横軸)。第二に、第一の流れのなか、とくに学習観になんらかの影響を与えると考える、授業イメージの存在を示す(縦軸)。この授業イメージが、先の横軸への影響力である。

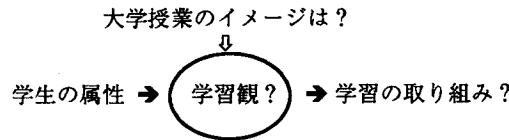


図1 「授業イメージ」「学習観」「学習の取り組み」についての関連

(1) 被験者およびインタビューについて

今回の被験者は、大阪と京都にそれぞれ所在地を置く大学の学生10名(男子学生4名、女子学生6名)を対象に、インタビュー調査を実施した。各学生の属性については、表1の通りである。

なお、インタビューの実施方法としては、半構造化法にて個人面接を行い、面接はすべて筆者が行った(所要時間は約30分)。調査は、平成12年7~9月に実施した。

表1 学生の属性

| 性別 | 学年 | 学部 | 設置者 | 将来の進路希望 |
|--------|-------|-------|-----|-----------|
| ・Uさん 女 | 学部4年生 | 人間科学部 | 国立 | 一般企業就職 |
| ・Dさん 男 | 学部4年生 | 体育学部 | 私立 | 高校、中学体育教員 |
| ・Mさん 女 | 学部3年生 | 人間科学部 | 国立 | 公務員 |
| ・Hさん 男 | 学部4年生 | 人間科学部 | 国立 | 公務員 |
| ・Nさん 女 | 学部2年生 | 人間科学部 | 国立 | 教育関係 |
| ・Sさん 女 | 修士1年 | 人間科学部 | 国立 | 博士課程進学 |
| ・Tさん 女 | 修士2年 | 人間科学部 | 国立 | 一般企業就職 |
| ・Rさん 女 | 学部4年生 | 文学部 | 私立 | 図書館司書 |
| ・Aさん 男 | 学部4年生 | 文学部 | 国立 | 弁護士 |
| ・Fさん 男 | 学部4年生 | 経営学部 | 私立 | 公認会計士 |

(2) インタビュー調査の手続き

各学生へのインタビューのはじめには、「このインタビューは、学習（学び）というものについて、個人的な考えを知るために行うものです。どうぞ気楽にして自由に思ったこと（考えていること）を、そのまま言葉にしてお聞かせ下さい」（趣意）と被験者である学生に告げて調査を開始した。また、インタビューの途中には、インタビューが円滑に進むよう、学習歴などいくつかの被験者の背景を尋ねる質問も行った。

なお、インタビュー内容については、本人の承諾を得て、すべてカセットテープレコーダーに録音した。インタビューの中心は、次の3つの質問である。

<インタビュー内容>

- ① “あなたがもつ大学の授業のイメージ（授業イメージ）とは？”
- ② “あなたにとっての学び（学習観）とは？”
- ③ “あなたにとっての学び（学習）の具体的な取り組みは？”

3. インタビュー調査の結果

(1) 事例紹介

ここで、事例として若干、学生のインタビュー結果の要約を、以下に記述してみたい。なお、文中の下線部は、次で述べるキーワード（または、キーセンテンス）として抽出した箇所を示している。

<Jさんの場合>

・（大学授業のイメージ） 例えていうのなら、図鑑のようなもの。ちょっとページをひらくと詳しいことがそれぞれ書いてある。それをみて、おもしろそうなところがあれば自分で掘り下げていくという感じ。結局は、いろんな学ぶものがあって、そのなかから自分で学んだのものを一つ。

みんなパターンがあるとは思うんですけど、自分がはじめにこれをと思って掘り下げていける人もあると思うんですけど。

・（学習観） 私のなかの学ぶは、海ほどの分野があるなかで、ひとつ自分にとっての当たりくじを引くような感じ。それがみつかれば学びが始まるという感じです。今の時点で続けられるものがみつかればそれはすばらしいけど、このさき何年かかって、年十年もつづくものが見つけていくのは、それはそれで楽しいのではと思う。気長な感じです。

・（学習の取り組み） 一つは、結局、先生の話を聞くのは、そのときだけにとどまるんですよ。どこから興味を伸ばすかというと、同年代の人たちの、今やっていることとか、例えば、学問というよりも、トイックを勉強しているとか、そういう話を聞くところから、そういう勉強もあるんだって感じで自分もやってみようかなあって。実際に学んできっかけになるのは、卒論であったり、ゼミであったりよりも、もうちょっと身近なところから、同世代の人たちとの情報交換から。

<Hさんの場合>

・（大学授業のイメージ） 一番思ったのは、高校までは、語学もそうですけど、教えるって感じがするんですよ。大学授業では、自分のやっていることを、研究していることをしゃべる、教えるといった感じじゃない。講演というか、そういう感じがする。そういう授業が多かった。

・（学習観） 今、卒業するためという。中学校なら高校いくため、高校なら大学いくため、大学のとくに、限定するとそういう感じがする。学ぶといつても意味が広いと思うんですけど。で、就職してからでも学ぶことはあるんだと思うんですよ。なんのかなと、ただ漠然としている。例えば公務員だったらただ就職するため、となる。

・（学習への取り組み） 昔からなんですよ。ノート中心で。板書しない先生では、結構しゃべる内容をメモする。

< Nさんの場合 >

- (大学授業のイメージ) 「野放し」しか思いつかない。授業に関係ないかのしませんが、授業に出なかつたら、あっさり切られてしまうんですね。あの、なんだかそれが高校からみたら異常だったので、そう思う。
- (学習観) 楽しみであると同時にくるしみもある。わかるとうれしいんですけど、それによって、自分の無能さがよりはっきりと鮮明になってくるので、だからその辺がくるしいんですよ。サドマゾ的な面があるなあって。
- (学習への取り組み) 興味ある授業は一生懸命ノートを取ること。心理学にひかれて入ってきたので、図書館を活用して、初步の初歩から本を読んで、やっとフロイト派なんかを覚えた。教育に関しては昔から興味があるので、自分なりに本を読んでいた。

以上、例として、3名の学生のインタビュー内容を抜粋して記述した。

この作業から、次段階へと分析を進めることにする。

(2) キーワード(キーセンテンス)によるインタビュー結果のまとめ

ここでは、インタビュー結果の分析を行う意味から、前述したように、各質問的回答として、端的にその部分を表現していると思われる語りの部分を、キーワード(または、キーセンテンス)として設定し、その抽出を行った。

表2 インタビュー調査の結果

| 被験者 (学生) | インタビュー結果(キーワード・キーセンテンスから) | | |
|-------------|---|--|------------------------------|
| | 大学の授業イメージ | 学習観 | 学習の取り組み |
| Uさん | ・「図鑑」のようなもの →ちょっとページをめくると詳しいことが書いてある。 おもしれければ振り下げる。 →I | ・海などの分野の中で、ひとつ自分の当たりくじを引くような感じ。それがみつかれば学びが始まる感じ。→② | ・同世代の人たちとの情報交換。 →b |
| Dさん | ・「積み木」のようなもの →積み重ねが大事。→II | ・人生の糧→① | ・専門雑誌の活用。→a |
| Mさん | ・「水族館」のようなもの →いろんなものがある中で、すすと通るとそれで終わり。興味ある人はじっと見ていいく。→I | ・生きていくには必要なものだが、どこままでいってもしっかりとしたものはないって感じ。→② | ・ノートをとる。→a |
| Hさん | ・「講演」のようなもの →自分のやっていることをしゃべる。→II | ・今、卒業するためのもの。 ・中学校なら高校へ行くため、高校へは大学へ行くため、そんな感じがする。→② | ・ノート中心で勉強。→a |
| Nさん | ・「野放し」のようなもの →出席しなかったらあっさり切られる。→III | ・楽しみであると同時に苦しもある。→② →わかる喜びと、自分の無能さが鮮明になる。 | ・一生懸命ノートをとる。→a ・図書館を活用。→a |
| Sさん | ・「おもちゃ箱」のようなもの →適当になんでも押し込められた雑多な感じ。 →I | ・麻薬のようなものという感じがする→逃げようと思っても逃げられず、取りつかれてしまう。→② | ・カセットテープを活用。→a |
| Tさん | ・「劇場」のようなもの →こちらが見ていておもしろいと思うかどうか。→II | ・自分のもってきたい問い合わせを、どうにかしようとする作業。 | ・独自のノートを作る。→a |
| Rさん | ・講義は「独演会」のようなもの→自分の説を論じる。→II | ・進んでするもの。→① | ・図書館をよく活用した。→a |
| Aさん | ・「バイキング料理」のようなもの→いろんなメニューがあるが、自分次第。→III | ・専門に根ざした基礎づくり。→① | ・先生との会話。→b |
| Fさん | ・「劇場」のようなもの →教室が舞台で、先生が演じている。→II | ・仕事に生かせる知識を得る。 →忍耐や集中力を身につける。→① | ・先生との会話。→b |

*表中の→は、キーワード(または、キーセンテンス)について、学生自分が語った注釈。また、表中の→の番号や記号は、表3の中での、「授業イメージ」「学習観」「学習の取り組み」における各番号・記号を示す。

その抽出されたキーワード（または、キーセンテンス）を、各質問に沿って一覧にまとめたものが表2である。

表2は、縦軸に各学生を、横軸に各質問項目をあてがい、質問それぞれの部分で代表的な語りとなったキーワード（または、キーセンテンス）をインタビュー結果から抽出し記述している。また、この表のなかでの➡印に続く数字・記号は、表3（次表）で用いた、授業イメージ、学習観、学習の取り組みの、各命名での数字・記号そのものである。

4. 考 察

（1）キーワード（キーセンテンス）からの検討

以上を踏まえて、抽出されたキーワード（または、キーセンテンス）から、どのような学生の傾向性が伺われたのか、以下、具体的にみてみたい。

① “あなたがイメージする大学授業とは？”

まず、この質問にたいして、今回の被験者となった10名の学生から得られた、いくつかのキーワードを、類似性や共通性を示す語を考慮してグループ化を行った。そしてさらに、学生のもつ授業イメージを解釈しやすくするため、各グループへの命名を行い、学生のもつ授業イメージを解釈していく。

その結果、大学授業のイメージとしては、3つの傾向性がみられた。それらを、以下にまとめてみるとする。

一つには、キーワードとしての「図鑑」、「水族館」、「おもちゃ箱」から、次のような傾向性を想定した。つまり、大学授業の営みを、ある種、閉ざされた枠組み空間のなかで展開されるものとし、その範疇のなかで、さまざまな事柄が取り出されるというイメージである。そこで、このイメージを、「枠組み空間」イメージとして命名した。

二つには、「講演」、「独演会」、「劇場」、「積み木」といったキーワードから、聴衆や観客の前に立つ、講演者や役者の意思や行為を中心とした場面を想起し、大学の授業イメージとしていると思われる。つまりこのことは、学生がイメージとして描く大学の授業は、学習者の前に立つ、教授者側の意思や行為が、決定的な授業の構成要因であると位置づけ、その場における、教授者側から学生への一方向的な働きかけ（ときには強制と感じられる）が中心となる、授業イメージとして捉えられているといえなくはないだろうか。これらを踏まえ、このイメージ傾向を「一方向的」イメージと命名をしておく。

三つには、「野放し」、「バイキング料理」といった、数少ないキーワードではあるが、先の「一方向的」イメージとは違う、もう一つの側面が浮かび上がる結果となった。それは、「野放し」であるが故に、自己の主体性が問われるといった（「バイキング料理」も同様に解釈すると）側面である。つまり、ある枠組み空間の中で、一方向的な授業空間による、受動的な学習者イメージを払拭する、自らが何らかの行為を起こし、何かを成し得るといったことを重視する、自己の主体性を強調するイメージである。このことを、「自己主体」イメージと名付けておくことにする。

このように、学生が描く大学授業のイメージには、「枠組み空間」イメージ、「一方向的」イメージといった一定枠の空間で繰り広げられる、一方向性の強い授業イメージと、その反面、ある枠内での自らの主体性を強調していく「自己主体」イメージという、おおきくまとめて3つの授業イメージが得られた。

次に、学習観についても同様にみていくことにする。

② “あなたの学習観は？”

授業イメージと同様に、学習観についても、インタビューから得られた学生個々の語りから、抽出したキーワード（または、キーセンテンス）をグループ化を試み、そこから学習観への傾向性を探りつつ、さらには、学習観への命名を行うこととする。

キーワード（または、キーセンテンス）から得られた学習観は、次の2つである。

一つには、「人生の糧」、「自分のもってきた問いをどうにかしようとする作業」、「進んでするもの」、

「忍耐や集中力を身につける」、「仕事に生かせる知識を得る」、「専門に根ざした基礎づくり」といったように、学習を、自分自身の人生へのプラス思考としてとらえ、将来への備えとする学習観が伺われる。これらをまとめて、「人生密着型」学習観と名付けた。

二つには、「当たりくじを引くようなもの」、「どこまでいったもしっかりしたものはない」、「楽しみであると同時に苦しみもある」、「麻薬のようなもの」、「卒業するため」など、先の自らの人生との関連性のなかで、学習を考える立場とは別に、自己の人生への葛藤をも含めて、混沌したイメージとしての学習観と読みとることができるのでないだろうか。よって、これらをまとめて「カオス型」学習観を命名する。

このように、今回対象となった、学生個々のインタビュー結果をグループ化することで、大学授業のイメージでは3つの授業イメージ、また、学習観では2つの学習観をそれぞれ描くことができた。ただ、今回の取り組みでは、改めていうまでもなく、大雑把な捉え方であり緻密性に欠けることは否めないものの、授業イメージや学習観から、ある程度の示唆が得られたのではないかと思われる。この点については、さらに後述してみたい。

最後にここで、本調査の3番目のインタビュー内容である、学生自身が用いている具体的な学習の行為について、実際にどのような取り組むがなされているのか、その大枠を次にみてみたい。

③ “あなたにとっての学び（学習）への取り組みは？”

まず始めに、当然のことながら、「ノート」、「カセットテープ」、「専門雑誌」、「図書館」といったツールを用いての学習がみてとれる。の中でも、とくに「ノート」の活用状況について、多くの学生がインタビューのなかで語っていたことが印象的である。これらをまとめて、学生は、自らの努力で学習情報を記録整理、活用するといった取り組みとしての、「自力型」取り組みが存在するといえよう。

また、「情報交換」、「先生との会話」といったキーワードから、学生は、他者とのコミュニケーションにより、情報源へのアクセスを求める取り組みが描かれた。これらを「対話型」取り組みとして、ひとまとめにしておく。

よって、学生の学びの取り組みについては、情報収集のためのアクセスの方法そのものが、いかになされるかといったところにあるといえよう。つまり、情報へのアクセスを自力で行うか、他者との関わりのなかで行うかといった取り組みである。

以上までの結果を、一覧にまとめたのが表3である。

次には、今回のインタビュー調査から得られたこのような学生のそれぞれの傾向性を、授業イメージからの学習観、学習の取り組みとして、捉え直してみることにする。

表3 授業イメージと学習観、学習の取り組み

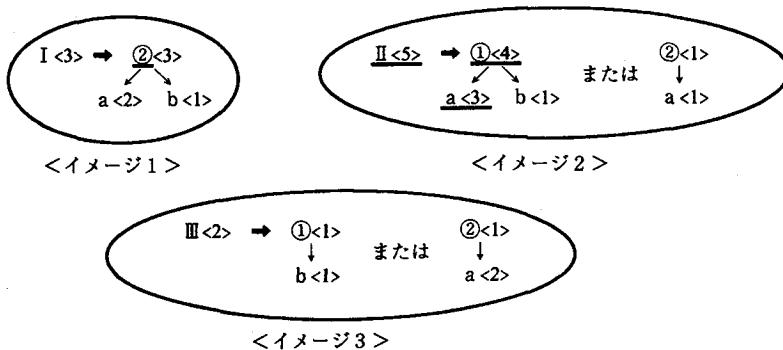
| | 命 名 | キーワード・キーセンテンス |
|---------|------------------|---|
| 授業イメージ | I : 「枠組み空間」イメージ | 「国鑑」(Uさん)、「水族館」(Mさん)、「おもちゃ箱」(Sさん) |
| | II : 「一方向的」イメージ | 「講演」(Hさん)、「独演会」(Rさん)、「劇場」(T、Fさん)、「積み木」(Dさん) |
| | III : 「自己主体」イメージ | 「野放し」(Nさん)、「ハイキング料理」(Aさん) |
| 学習観 | ① : 「人生密着型」学習観 | 「人生の糧」(Dさん)、「自分のもってきた問いをどうにかしようとする作業」(Tさん)、「進んでするもの」(Rさん)、「忍耐や集中力を身につける」(Fさん)、「仕事に生かせる知識を得る」(Fさん)、「専門に根ざした基礎づくり」(Aさん) |
| | ② : 「カオス型」学習観 | 「当たりくじを引くようなもの」(Uさん)、「どこまでいったもしっかりしたものはない」(Mさん)、「楽しみであると同時に苦しみもある」(Nさん)、「麻薬のようなもの」(Sさん)、「卒業するため」(Hさん) |
| 学習の取り組み | a : 「自力型」取り組み | 「ノート」(M、H、N、Tさん)、「カセットテープ」(Sさん)、「専門雑誌」(Dさん)、「図書館」(N、Rさん)、 |
| | b : 「対話型」取り組み | 「情報交換」(Uさん)、「先生との会話」(A、Fさん)、 |

(2) 「授業イメージ」からの「学習観」と「学習の取り組み」

図2は、授業イメージから学習観、学習の取り組みを捉え直したイメージ図である。

学習観からの学習への取り組みといった流れのなかで、授業イメージの関与を示すイメージ図である（なお、図中の数字・記号については、表3を参照のこと）。

ここで、このイメージ図をもとに、先で得られた授業イメージ、学習観、学習の取り組みそれぞれの傾向性（学生像）をもとに、再度、学生個々のパターンからこの三者の関わりの検討を行ってみたい（表2参照）。



*<>：その傾向を示す人数

図2 「授業イメージ」からみた「学習観」と「学習の取り組み」

まず、学生個々の授業イメージ、学習観、学習の取り組みへの傾向性は、表2のなかの➡印に続く数字・記号であることは先に述べた。そこで学生個々のパターンを整理し、どのようなパターンが個々の学生でみられるのか、その頻度をカウントして図式化したものが、図2のなかで示した、細線の楕円で囲む3つのイメージ図である（図2中のイメージ1、2、3）。図中の<>内の数字は、その傾向を表す人数を示す。

例えば、Uさんの場合を見る。Uさんの場合、②：「カオス」型学習観をもち、実際の学習の取り組みでは、b：「対話型」取り組みを重んじる傾向がみられた。そこで、このパターンを生み出す授業イメージをみると、I：「枠組み空間」イメージをもつという捉え方である。他の学生についても同様の捉え方を行い、得られたイメージ図が、イメージ1、2、3の各図である。

概して、各イメージをもとに、学生の傾向から描ける学生像について、次のようなことがいえよう。

大学授業のイメージとして、I：「枠組み空間」イメージ（3名）としてとらえる学生のもとでは、②：「カオス型」学習観（3名）への傾向を示した。しかし、学習の取り組みについては、とくに特徴はみられない（イメージ1）。また、III：「自己主体」イメージ（2名）の学生には、とくに学習観と学習の取り組みでも、なんらかの特徴を見いだすことはできなかった（イメージ3）。

しかしながら、ある種の特徴を示したのが、II：「一方向的」イメージをもつ学生たちである。

その特徴とは、大学授業を、II：「一方向性」イメージ（5名）として捉える多くの学生が存在し、それら学生の学習観は、①：「人生密着型」学習観（4名）であり、そして、学習の取り組みとしては、「自力型」取り組み（3名）が多く行われているという点である（図2、イメージ2の下線部を参照）。

(3) 学習観モデルからの検討

さらにここで、山地(1988,1991)の学習観モデルを援用し、授業イメージと学習観の関連性について考察を行ってみたい。

山地は、大学生のもの学習観のモデルを、次のように捉え、そのモデル化を行っている。そのことについて、簡単に概説した後、今回の結果とつきあわせて、授業イメージをとしての学習観から、いくつかの学生像を考えてみたい。

学習観モデルは、山地によると、次の3つの側面から捉えられるとしている。それら3つの側面とは、自己決定感のあり方、学習過程、目標（結果）である。ここでいう自己決定感とは、「内外の何らかの圧力によるではなく、自分自身の意図に基づいてその行動を始発しているという感覚」(山地1991,p.123)をいう。

ただ、このような3つの側面から単純にモデル化を行うのではなく、その前提として、次の3つの語を被験者である学生に刺激語として与え、その関連性から学習観のモデル化を試みている。なお、それら3つの語とは、一つには、受験との関連でネガティブな「勉強」、二つには、主体的な探求と気づきに力点を置く「学ぶこと」、三つには、あまりイメージが明確にならない「学習」である。

そして、得られた学習観のモデルは、次の3タイプである。

まずは、「勉強」という刺激語との関連性から、「特定の結果の達成やそれに伴う承認を目標にして、強制観をもちながら行われる収束的学習」(p.123)である学習観である。次に、「高い自己決定感のもとで、学習材料の内容を個人的な知識や体験と照らし合わせて様々な観点から吟味」し、「その結果をさらに発展的に情報を求めて自分なりに理解を深めていくような学習（拡散的学習）」(pp.123-124)観である。そして最後に、「気づきは無意図的な体験経過から生じるものであるから、目標試行的でないわば自由な状況が前提」としての「結果として、認知面だけでなく感情面での再体制化」(p.124)を期待する学習観である。

これらを順に、「遂行志向型」、「課題志向型」、「過程志向型」の、3つの学習観モデルを山地は描き出している（表4）。そして彼の結論として、課題志向型にみる学習過程の拡散的学習に特色を見いだし、また、従来では取り上げられなかった、過程志向型（気づき）を取り上げている。

一面では、今回筆者が行った学習観の把握では、授業イメージが与える学習観という視点からであり、山地の場合、刺激語の活用からの学習観の把握という違いがある。つまり、学習観を醸し出す背後の構成概念への着目の差といえよう。

Cranton(1992)は、学習観を生み出す、学習者自身の背後の構成概念を、次のような4つの側面から捉えている。それらは、①経験、②哲学的枠組み、③価値観（価値観の受容）、④自律性の4つである。

大雑把に筆者なりに解釈すると、学生の属性としての学習歴は、学習経験として蓄積されるであろうし、哲学的枠組みや価値観は、学習経験の積み重ねに依存しつつも、学習過程や目標（結果）に影響を与えるであろう。また、自立性そのものは、さまざまな学習歴（経験）を通じて得られた、自らの意思に基づく、学習活動の淵源といえるかもしれない。

今回、このような学生の背後の構成概念を、一種、イメージ（授業イメージ）として捉え直すことで、学習観の違った見方ができないものか、また、学習の取り組みを検討できないものだろうか。

表4 3つの学習観

| 学習観の型 | 自己決定 | 学習過程 | 目標（結果） |
|-----------|------|------|-------------|
| ・「遂行志向」型： | 強制感 | 収束的 | 暗記／承認 |
| ・「課題志向」型： | 選択的 | 拡散的 | 学びの深化 |
| ・「過程志向」型： | 自由 | 気づき | 認知面／情緒面の再構成 |

山地(1991,p.124)による、一部改変。

山地の刺激語からの学習感では、3つの型が、筆者では、授業イメージに3型、そこから、学習観と学習の取り組みとして、それぞれ2つの型が導き出された。山地の学習観と筆者の学習観の比較ではなく、授業イメージとの比較が、学習観からの学生像を探索する際に有効であるように思われる。

つまり、先に示した山地の「遂行志向型」学習観は、特定の結果の達成やそれに伴う承認を目標に、強制観をもちらながら行われる収束的学習であり、教授者側から学生への一方向的な働きかけ（ときには強制と感じられる）が中心となる「一方向的」イメージと重なるように思われる。今回では、このイメージが特徴的な学生像として描き出された点に、注目したい。

また、高い自己決定感のもとで、学習材料の内容を個人的な知識や体験と照らし合わせて様々な観点から吟味し、さらに発展的に自己理解を深めていく拡散的学習としての「課題志向型」学習観は、一定の閉ざされた枠組み空間のなかで展開される営みであとともに、その範疇のなかで、さまざまな事柄が選択的に取り出され、学びの深化を図ろうとする「枠組み空間」イメージと重なり合う。

そして、最後に、いわば自由な学習状況を前提し、気づきといった学習過程から、認知面・情意面の再構築を図る「過程志向型」学習観についてである。これは、学習者自らが行為を起こし、そこから何かを得るという、自己主体を強調する「自己主体」イメージとして重ね合わすことができるのではないだろうか。

5. おわりに

今回、大学授業のなかにみる学生像を探る目的で、学生へのインタビュー調査を実施した。

具体的には、学生がもつ大学授業のイメージを中心に、そこから発する学習観や具体的取り組みといった語りを、インタビューを通して収集し分析・検討を行った。

今回の調査では、数少ない被験者であり、一般化や大枠としての解釈には限界がある。しかしながら、授業イメージ、学習観、学習の取り組みという、それぞれ3つの傾向性を吟味するなかで、若干ではあるものの、ある一つの特徴的な学生像が得られた。

それは、大学授業を「一方向的」イメージとして語り、「人生密着型」学習観をもつ、学習の取り組みとして「自力型」取り組みを語る学生像である。

この試みで得られた知見は、大学授業を考える検討資料として、有用と思われる。

「一人ひとりと取り組みながら、人びとが変化し成長するように促進し、援助し、勇気づけ、支援し、問いかけている。このような取り組みは、学習する人びとがどんな人かを認識しなければできない」(Cranton,p.86)との言葉があるように、学習者の視点で、さらに、大学授業の研究を行っていきたい。

<引用文献>

- ・秋田喜代美1996「教える経験に伴う授業イメージの変容－比喩生成課題による検討－」『教育心理学研究』第44巻、第2号、pp.176-186
- ・Elbaz, F. 1981, The Teacher's "practical knowledge" :Report of a case study. *Curriculum Inquiry*, 11, pp. 43-69
- ・梶田正巳・石田勢津子・宇田光1984「『個人レベルの学習・指導論 (Personal Learning and Teaching Theory)』の探求」『名古屋大学教育学部紀要－教育心理学科－』第31巻、pp.51-93
- ・溝上慎一2001「大学生の適応と自己の世界」溝上慎一編『大学生の自己と生き方』ナカニシヤ出版、p.19
- ・Patricia A. Cranton 1992 Working with Adult Learners. Wall & Emerson. 1999 入江直子・豊田千代子・三輪建二訳『おとな学びを拓く』鳳書房、p.78-86
- ・山地弘起1988「動機づけにおける自己決定性の検討」『東京大学教育学部紀要』第28巻、pp.317-325
- ・山地弘起1991「大学生の学習観に関する探索的研究」『東京大学教育学部紀要』第31巻、pp.121-129

Relevance of the Image to a University Classes, Study view and Study activities

KAWAI Masataka

The purpose of this research is to explore, by means of interviews, the relevance that study view and study activities have to the image of university classes. At the time of research, the image of university lectures was focused and such relevance was searched in 3 subjects along an examination carried out.

That is, through study and activities view drawn from the image of university lectures, it was accomplished a repairing examination of the study and activities view that each student had.

From the investigation of relevance of study view and study activities, one characteristic of student image was obtained. Students who hold a "directional image" of university lectures has a study view like a "life-adhesion type" and shows his "one's own strength type" measure as a measure of study.

It is concluded that knowledge and information acquired along this research are useful indeed as examination data worth considering for university classes.